

〔研究論文〕

小学校社会科における意思決定型授業実践の検討  
—佐賀大学文化教育学部代用附属佐賀市立本庄小学校社会科部の実践を事例に—  
Study on decision-making class practice in elementary school social studies  
—A case study of Social Studies in Honjo Elementary School attached to Saga University—

坂井 清隆  
Kiyotaka SAKAI

福岡教育大学教職実践ユニット

(2020 年 1 月 31 日受理)

本研究では、佐賀市立本庄小学校（佐賀大学文化教育学部代用附属：現教育学部代用附属）社会科部の教育実践を対象に単元構成や授業構成、学習者評価の観点から検討を加えることを通して、その特徴や現代的な意味を明らかにすることを目的とした。単元構成に関しては、学習問題の二重構造を基盤とした問題解決学習を軸としていることが分かった。また、社会的問題を学習内容として位置づけ、現実の文脈を重視した単元構成であることが明らかになった。授業構成は、単元の中核となる授業に必ず話し合い活動が位置づけられ、討論やディベートなど対立点を明確にしたり、合意を求めたりする活動に重点が置かれていることがわかった。学習者評価については、授業方法とも関連するが、思考ツールへの記述が挙げられる。この思考ツールとそれをもとにした話し合い活動での変容を可視化することによって、子供の社会的思考・判断の評価を行っていることが分かった。このような取り組みは、近年注目されているパフォーマンス評価論や逆引き設計論、学習のための評価論の先駆的・試行的な取り組みとしての要素をもつものであることが分かった。

キーワード：小学校社会科 公民的資質 意思決定型授業

## 1 研究目的

1990 年代に入り、国際社会の中で日本社会も多様な価値観が溢れ、これまでにない様相を呈すようになった。そのため、社会科教育は、様々な目標原理、方法原理、内容原理が表出し、特に、社会科教育の固有性を規定する「公民的資質」の内実に関する議論が盛んに行われるようになった。つまり、それまで「公民的資質」の中核として存在した「社会認識形成」から、「資質形成」に転換するものである。社会科は、「社会認識形成を通して市民的資質を育成する」教科<sup>1)</sup>であり、豊嶋・柴田 (2018) が指摘するように、社会科は、1947 年の誕生以来、一貫して資質形成までを目標とす

る唯一の教科として存在してきた<sup>2)</sup>。この「市民的資質」の本質を巡る議論の中で、1990 年代から、科学的な事実認識と反省的に吟味された価値判断に基づいて意思決定する能力を「市民的資質」の中核をなすものとして研究が重視されるようになった<sup>3)</sup>。例えば、小西 (1992) が提唱する「提案する社会科」<sup>4)</sup>は意思決定型の典型的な学習スタイルであり、「出力型授業観」に基づいた数多くの実践がある。小西の「提案する社会科」は、これまで社会科の教育内容としていた社会的事象（社会の仕組みなど）が、社会的論争問題に取って変わり、議論によってその解決策を考えていくような授業形態を重視した。このような教育「観」や授業「観」の転換<sup>5)</sup>によって、教育現場では、

公民的資質の育成にダイレクトに寄与するとされる意思決定型授業が数多く実践された。

この意思決定型授業を二十年以上前から実践しているのが、本研究で取り上げる佐賀大学文化教育学部代用附属佐賀市立本庄小学校社会科部（以下本庄社会部と表記）である。本庄社会部は、「如何にして公民的資質の中核に位置づけられる価値判断力・意思決定力の育成を図るか」という課題に、長い間、真摯に取り組んできた。

ただ、本研究は、本庄社会部の実践に対して、単に意思決定型授業の類型を示したり、単元のモデルを示したりするものではない。筆者が注目したのは、本庄社会部の授業実践における現代的意味である。つまり、この二十数年間の本庄社会部の試みは、近年注目されている松下のパフォーマンス評価論<sup>6)</sup>や Wiggins, McTighe の逆向き設計論<sup>7)</sup>、Newmann の真正の学習論<sup>8)</sup>の試行的・先駆的な取り組みとして、位置付けられるのではないかと考えたのである。

本研究は、本庄社会部の実践を、単元構成、授業構成、学習者評価の観点から詳細に検討し、社会科教育実践の特性や課題、さらには現代的な意義を明らかにすることを目的とする。

## 2. 研究の対象

本研究においては、「研究的に実践された社会科授業」として、本庄社会部の実践を取り上げる。その理由として、本庄社会科部は、全国に先駆けて社会科において意思決定型授業実践を行っている。具体的には、「価値判断・意思決定」を学習方法として取り入れ、学習の出口を「提案」や「意見文の作成」など、それまでの「自分は何ができるか」といった行動目標から、社会とのダイレクトな関わりの中で「資質」を高めていく能力目標にシフトチェンジした経緯があるからである。さらに校内研究に全国的にも取り組みが少ない「仮説検証型」の研究スタイルを取り入れており、比較的汎用性のある単元モデルを示すと共に、仮説レベル・目標レベルでの検証が精緻に行われているからである。

## 3 研究の方法

本研究では、本庄小学校の平成7年（1995年）～24年（2012年）の研究紀要を収集し、この研究紀要に掲載されている本庄社会部の実践を分析した。まず、分析の観点として、単元構成、授業

構成、学習者評価を挙げる。これらは、学習内容と学習方法、そして学びの具体的な姿を示す上で重要な観点になる。その際、Newmann の学習の次元を下敷きにしながら、単元開発の構造、評価、協働的な学びの様相、本質的な問いなどに関して、詳細に検討を加えていく。次に、特に新学習指導要領（2017）に示された社会に開かれた学習課程（カリキュラム・マネジメント）について、学習問題の設定に焦点化して検討を行う。最後に、本庄社会部の実践の取り組みについて現代的な価値付けを行うこととする。

なお、筆者は、この本庄小学校社会科部に平成14年から19年まで5年間在籍し、実践研究を中心となって進めてきた経緯がある。この点において、実践研究の当事者としてナラティブな観点からも分析を行うことができると考える。

## 4 分析・考察

### (1) 単元構成

#### ① 学習問題の構造について

まず、本庄社会部が計画する単元では、学習問題の二重構造が指摘できる。具体的には、単元の導入段階では、「学習問題1」によって、社会的事象の構造的把握に関わる事実関係としての知識（事実的知識・説明的知識など）の習得<sup>9)</sup>と同時に、社会的な問題の発見、つまり「学習問題2」を設定していくことが特徴的である。「学習問題2」は、実践者の意図として「現実の文脈性」を意図・意識したものであることが読み取れる。このことは、藤井（1996）の、「仮の学習問題」と「真の学習問題」の理論<sup>10)</sup>を援用していることがわかる。この「学習問題2」である社会的問題の解決に向かわせるために、「学習問題1」で習得した知識を、必然性のある調べ活動、必然性のある話し合い活動で活用しながら学習を進めていく単元構造になっている。したがって、「学習問題2」が「真」であり、単元を貫く「問い」として切実性をもって子供の学びを支えることになる。換言すると、本庄小社会科部のMQ（メインクエスチョン）は「学習問題2」における問いであり、SQ（サブクエスチョン）は「学習問題1」における問いが中心あると言えよう。

#### ② 「提案」について

単元終末には、学習成果のOutputとして、どの単元においても、学習者の「提案文」「意見文」作成が設定されている。子供にとっては、この「提案」の活動が、社会とダイレクトにつながる要素

を持つものであることがわかる。このことは、近年注目されている「パフォーマンス評価」(松下2007)の先駆けであるとする取ることができる。ただ、それがパフォーマンスでありながらも「評価」として機能している実践事例はほとんどない。

また、単元構成として、「出口」を意識した構成を行っていることから、パフォーマンス評価と同様に注視されている「逆向き設計」的にはなっていない<sup>11)</sup>。ただ、このことに関しても、無自覚であることが推察される。つまりパフォーマンス評価の三要素「本質的な問い／原理と一般化／永続的理解」との関連性は薄いとともに、学習者と共有される評価指標としてのルーブリック(rubric)に関してはその提示は皆無である。加えて、単に「出口」から単元を構想するだけでなく、「逆向き設計」で重視されている「求められている結果」「承認できる証拠」「学習経験と指導」の統合的な計画性にまでは至っていない。

### ③ カリキュラム構成

本庄社会部の構想するカリキュラムは、同心円拡大理論を基盤とした教科書における内容配列を中心としているが、現実の文脈性を重視したトピック的な単元も年間カリキュラムに組み込んでいる。本庄社会部は、同心円拡大理論に対する批判があることも踏まえつつ、子供の発達段階を最大限考慮しながら、内容配列を行っている。カリキュラムの内容構成は学年が上がっていくにしたがって、身近な地域→市→県(市・県いずれも、自然の特色、土地の使われ方、伝統的に伝わるもの、身の回りの仕事、暮らしを支える公共的な働き 安全・清潔など)→日本(国土の様子、農業・工業・漁業・畜産業・林業・情報産業など)→日本の歴史、政治の働き(行政・司法・立法)国際理解に拡大するわけであるが、この内容配列の範疇で、現実の「文脈性」を重視した単元を開発している。ただ、現実の文脈を重視していると言っても、学年が上がるにつれて、子供の生活レベルとは実感的にも距離的にも乖離していくことが危惧されるので、このことに関しては最大限の注意を払っていることが推察される。

### ④ 「本質的な問い」について

「本質的な問い」に関しては、カリキュラムレベル、単元レベル、授業レベルで捉えた場合、カリキュラムレベルについては、その意図は考慮されていない(そもそもそのような事を示す資料がない)。単元レベルでは、市民的資質を育成していく上で本質的な問いが散見される。また、授業レベルにおいてはほとんどが解決策・プラン・方策・

アイディアの「価値判断」を問うもの、つまり方法論的な問いになっている。よって、カリキュラムレベル、換言すれば単元を貫く「問い」は、十分には意図されていないと考えられる。

### ⑤ 単元構成原理

単元の構成原理については、目標原理＝社会形成(市民的資質の育成に特化した目標)、方法原理＝価値判断・意思決定 話し合い(討論・ディベート・意見交流など)、内容構成原理＝社会的、歴史的論争問題、評価原理＝ツールへの書き込み内容と話し合い活動等における発言内容の変容を質的に評価、である。このことは、問題解決学習を基盤としながら、現代的な意味を持つ単元構成であることがわかる。これまでの社会科教育が、科学的・社会的認識の習得に特化していたことを踏まえると、市民的資質形成に大幅にシフトチェンジしていることがうかがえる。

#### (2) 授業構成

##### ① 「公」と「私」

授業実践における意思決定の主体者は、どの紀要をみても様々であるが、例えば「環境庁の役人として」「団地に住んでいる人として」「イベント主催者として個人商店の店主として」「CMソングをつくる者として」など、あらかじめ設定している場合がある。一方、今の「自分」が客観的に判断して、意思決定する場合がある。つまり、「公」の立場を意識させた場合と、「私」に留まった場合の両方が混在している。「公」の立場としては、意思決定主体者としての施政者、カウンターパート、一市民など立場のバリエーションがある。これに対して、「私」の場合は、「あなたはどのように思いますか?」という問いが示す通り、個人内の判断に留まっている。

##### ② 思考ツール

本庄社会部の社会科実践の特徴の一つとして挙げられるのが「ツール」の開発である。この「ツール」(例えば巻末資料1に示す「視点表」「チェックシート」「シンキングマップ」「プラン表」「解決策の評価表」など)に記入し、問題解決の解決策・プラン・方策・アイディアなどを評価したり、優先順位を決めたりすることで、それに含意されている「価値」を明確にしたり、対立する「価値」を意識したりすることを可能にしている。そして、このツールの記入内容(の変容)こそが、思考を可視化し、学習者の「思考力・判断力」評価の対象の一つとなり得ている。この意味においては、個人内評価であると言える。また、自分の意見の変容を自覚化する上では有効であること



が検証されている。このようなツールの活用によって、提案の合理性、または非合理性に関して評価することも可能になっている。さらに、このようなツールの開発は、思考・判断を評価するワークシートの開発に大いに示唆を得る。加えて、本庄社会部は「真正の評価(authentic assessment)」論の先駆けとして思考判断の精緻な評価を行っており、価値論を踏まえて子供の思考変容を捉えていることも特筆すべきことである。

### ③ 協働的な学び

上記の思考・判断ツールとも関連するが、このツールを用いることによって、ある程度の「協働性」のある学びを成立させていると考えられる。

では、なぜこのようなツールが必要なのか。それは、単元の内容構成の中核に位置づけている「社会的問題」と大きく関連する。社会的問題とは、「解決しないと近い将来、より多くの代償を支払うことになる問題」「各々の価値観の違いから、双方が問題視しているにもかかわらず、なかなか合意に達しない問題」「普遍的な問題であり、社会に属する広範囲の人々や生活・自然環境に影響を与える問題」であるため、「大人が現実の世界で直面している難題」である。つまり、複雑に絡み合う問題状況（価値葛藤状況）と考えられる解決策の明確化及び可視化を図るためには、なんらかの「ツール」が必要であるというわけである。

本庄社会部が開発したツールの共通する要素は、問題解決にかかわる「立場」やそれぞれの立場の人々が大切に「価値」である。「立場の重さ」や「優先される価値」について話し合うことで社会的な問題の解決を模索していこうとするものである。ここでの問いかけは「なぜ〇〇さん立場たちは△△を大切にしている価値のだろう」という探究がベースとなって、それが活用されていくことになる。このような「立場」と「価値」の複雑な組み合わせや絡み合いによって、カウンターパートも含めて利害関係を顕在化させ、対立構造を生み出す、もしくは再現することによって話し合う必然性をもたせていると考えられる。

### ④ 意思決定の類型

意思決定の類型については、豊寫の分類によれば、自己調整／公的論争／特定状況の問題解決／公共圏の構築として分類される。実践の量に関しては、特定状況の問題解決が一番多く、単元を構成していく上で、設定しやすいものであることが言える。初期（平成7～）には自己調整型単元構成も散見され、価値判断・意思決定型社会科への移行期であったと推察される。

### （3） 学習者評価

本庄小では、「目標・内容」の視点において、仮説検証型の研究スタイルを採用し、これまでの研究の歩み、社会の要請、綿密な実態調査から導き出された目標と教科の本質を踏まえた仮説（実践への手立て）を設定することによって、より科学的なアプローチを行っている。また、各教科等部が行う仮説の検証は、1年に数回実施されており、評価も細部にわたって緻密に行われている。このことによって、校内授業研究におけるPDCAサイクルが十分に機能していることがわかる。評価の対象は、それぞれのプロフィールを挙げた抽出児3～4名程度と学級全体の児童である。特に抽出児は、仮説検証のための授業における発言内容（教室談話のプロトコル）やワークシートの記述から、仮説の有効性が質的に検証されている。一方、学級全体は、ワークシートの記述を中心にサーベイ化されて、量的に学級全体の傾向性を示している。このように、質的、量的両面から検証されている実践研究はほぼ見当たらず、特に社会的思考力・判断力を評価とした場合、他の教科への援用性をもつと考えられる。

## 5 研究の結果

本研究の分析結果として、特に学習問題から抽出された言語レベルの視点を明示する。

**学習問題の文脈性：**社会的問題を、「学習課題」「学習内容」に転換しており、子供の関与の度合い（学習問題の解決への切実性）について考えさせている。評価に関しては、カリキュラム編成（コアカリキュラム）、単元構成の工夫（羅生門的アプローチ）など、文脈の妥当性検証について、子供の身の丈にあっていない、子供に問題解決の切実性が薄いなど 子供の実態から学び（社会科の学習として）として、その文脈が妥当かどうかの検証を行っている。

**他者との協働性：**本庄社会部における協働性とは、個の意思決定（自己調整のための）から集団での意思決定話し合いの必然性を含意するもの）に向かうものである。例えば、社会的問題に対する解決策やプランの有効性を協働的に追究したり、学級集団で意思決定したりすることを協働的に行なっている。単元計画で特徴的な文言が「〇〇を決めよう」「〇〇をつくろう」である。

**知識の活用性：**単元前段で習得した知識（記述的知識、説明的（概念的）知識など）を問題解決の際に活用できるような単元構成になっている。た

だ、単元を通した学習が、知識を習得する、事象の関係性を理解するに留まっている単元も見受けられる。一方、「社会がわかる」レベルから、「社会をつくる」レベルいわば規範的知識の獲得に向かっている実践も散見される。

**問いの一貫性：**単元を貫く「問い」として、学習問題（学習課題）が設定されている。しかし、その「問い」は、教師が課す「題」となっており、子供が問う「題」になっているとまでは言えない。ただ、「問い」は、一貫していなければならないのかということに関しては、問いの連続性・継続性・発展性の観点からの検討が必要である。

**問いの本質性：**本庄社会部の実践の「問い」は、例えば、平和とは何か？なぜ人間は争うのか？歴史とは何か？というような哲学的な問いではなく、これからの街づくりのあり方、これからの林業のあり方、これからの国際貢献のあり方、これからの日本の工業のあり方、これからの〇〇町の安全のあり方などが示すように、未来志向的な問いとなっている。いずれの問も「答え」が明確にはないものであり、このような問いが、子供の学びを促進させていくものであると考えられる。

**理解の永続性：**このことは、習得した知識・概念の定着を意味している。これは、概念形成のプロセスにおける思考の働きの援用性ととらえることができる。（前に学習した考え方は、この学習でも使えそうだね。例えば本庄社会科部でいう「観点」の援用性→コストの面から 環境の面から 労力の面から 新たな問題発生の面から お金・経済の面から など）つまり、このような観点の積み重ねが、社会的な事象を捉える複数の観点となり、そのことが社会的な事象の意味が概念化され、永続的な理解につながっていくと考えられる。

**知識の一般性：**上記にも関わるが、ある事例で学習したこと（習得した知識）を、他の事例でも活用してみて、一般化可能（適用可能性を示す）であることを示す、また、一般化できないことを示すものである。この単元で学んだ事が、他の単元で使えるか、使えるのはなぜか、使えないのはなぜか、を考えさせることが重要である。

**問いの規範性：**本庄社会部の単元の中核をなす「問い」は「規範的知識を問う」ものである。「〇〇であるべき」「〇〇の是非は？」という価値認識に関する問いは、二項対立型の話し合いを組織することが可能なものであり、学習者や教師の価値判断を学習の対象とし、自己の意思決定にダイレクトに関わる「問い」である。

**創作・表現としての提案性：**本庄社会部で設定す

る単元の終末には、ほぼ「提案文」「意見文」「パブリックコメントへの投稿」などが設定されている。このような「提案」は、今でいうパフォーマンスを意識したものであり、単元のゴール（評価）として、単元導入時に示したものである。また、単なる表現活動の一環（国語との関連の中での意見文、作文の作成）でも、安易な行動主義でもなく、表現活動を最終段階に位置付けることで、学習の目的意識・必然性を持たせることにつながっている。「目標・評価としての提案」への転換は、特筆すべきものである。

**学びの真正性：**仮説的に「現実（の問題 問題解決）への関与」することが、子供の学ぶ意欲を継続させ、向上させ、動機付けになる、とするならば、「現実への関与」は、子供が本気になり、学んだことが永続的理解（知識として定着する・一般化しやすくなる・概念化しやすくなる）につながっていることが推察される。なぜなら「他人事ではない」「当事者意識がある」ことが、責任感の育成につながっているようである。また、「現実世界への挑戦への感触」（ウィギンス）＝つまり現実の問題解決への手応えや多少の困難性があることが、その「感触」を得ることになっている。単元構成の三要素として①考えたいという切実感②考え方の提示③考える場（考えたことをぶつけ合う場）の設定が本庄社会部ではなされている。

**学びの促進性：**本庄社会部での意図する子供の学びを推し進めるものは、自らの「問い」「現実への関与」その「手応え」「おもしろさ」「必然性」であると考えられる。それは、単元を通して、徐々に促進されていく仕掛けが数多くなされている。

**問題の深刻性：**このことは、社会科の教育内容に関わるものであるが、社会的問題つまり文脈性とも関連しつつ、その問題の因果律（原因と結果）を追究する中で、様々な立場の存在を知り、その不利益の大きさや不公平さなどの「深刻性」が深ければ深いほど、仮説的ではあるが、問題解決の切実性が高まると言える。

## 6 まとめ

以上見てきたように、本庄社会部の理論的実践的研究の背景は、前出の小西（1994）「提案する社会科」および佐長（1997）「社会科でディベートする子どもを育てる」<sup>12)</sup>である。両氏の理論的基盤に基づきながら、実践を通して、社会科教育の究極の目標である「公民的資質」の内実を、「知

識・理解」から「思考・判断・表現」に転換し、「資質・能力」として捉え直している。よって、本庄社会部は、1990年代後半から現在においても、単元構成や授業原理に「価値判断」や「意思決定」もしくは「価値判断・意思決定」の方法論を取り入れ、実践研究に取り組んでいる。その特徴の一つとして、学習問題の設定が挙げられる。それまでの学習問題が知識や理解（いわゆる社会認識形成）を追究する問題であったのに対し、平成7年から、思考・判断（いわゆる社会形成）を追究するものとなっている。さらに「提案」という学習の出口は、近年注目を集める「パフォーマンス Performance」の先駆けであると言えよう。しかしながら、その「提案」は、学習の結果、つまり、個人もしくは集団での意思決定の結果としてまとめられたものであり、個人内の思考や判断の伸びや変容を「評価」するものとはなっていない。その点において、パフォーマンス評価（Performance Assessment）とは質的に異なっていることが明らかになった。

最後に、本庄小学校校内研究のあり方について若干の考察を行っておきたい。当時の本庄小学校の校内研究の基盤は、仮説検証型の実践研究である。どの年代の紀要にも掲載されているが、教科部が提案した要項を年間数回の審議会を通して、練り上げている。特に仮説の有効性に関しては、抽出児の発言や記述とともに学級全体の傾向性や分布などを示した質的・量的双方のアプローチによって精緻に検証がなされていると言えよう。ただ、校内研究においては、各教科部の研究仮説を検証することが目的化していることも否めない。また、研究の仮説にこだわるあまりに、授業設計の基本的な部分の詰めの甘さや曖昧さがあったり、仮説の繰り返しによるマンネリ化した授業展開や教科等の本質が損なわれていたりする指導案も散見される。つまり、研究仮説を「絶対視」してしまい、仮説に乗らない子供を捨象して

しまっている可能性があるのである。確かにこのことについては、量的に学級全体のサーベイで有効性を検証しているとも言えるが、果してそうであらうか。仮説を絶対視しすぎるがあまりに、子供への柔軟な対応や弾力性のある単元展開については明らかになっていないのではなかろうか。換言すれば教師のねらっためあてに対して予定調和的に子供が向かっていくということが前提になっていることが危惧されるのである。今後の本庄小学校の校内研究の改善が望まれる。

#### 【註】

- 1) 児玉康弘 (2012) 「社会科と社会科学」社会認識教育学会編『新社会科教育学ハンドブック』明治図書 p.43
- 2) 豊嶋啓司 柴田康弘 (2018) 「社会科パフォーマンス課題における真正性の類型化と段階性的実践的検証」『社会科教育研究』No.135 p.14
- 3) 小原友行 (2010) 「合理的意思決定」日本社会科教育学会編『新版社会科教育事典』ぎょうせい pp.14-15
- 4) 小西正雄 (1994) 『提案する社会科』明治図書
- 5) 小西正雄 (1997) 『消える授業 残る授業—学校神話の崩壊のなかで—』明治図書オピニオン叢書
- 6) 松下佳代 (2007) 「パフォーマンス評価—子供の思考と表現を評価する—」日本標準ブックレット
- 7) Grant Wiggins, Jay McTighe 西岡加名恵訳 (2012) 『理解をもたらすカリキュラム設計—「逆向き設計」の理論と方法』日本標準
- 8) Fred M. Newmann, 渡部竜也ら訳 (2017) 『真正の学び/学力 質の高い知をめぐる学校再建』春風社
- 9) 岩田一彦編 (1995) 『社会科の授業設計』p57 岩田一彦編 (1993) 『社会科の授業分析』東京書籍 p103
- 10) 藤井千春 (1996) 『問題解決学習のストラテジー』明治図書
- 11) 西岡加名恵他編 (2015) 『新しい教育評価入門—人を育てる評価のために—』有斐閣 pp.144-167
- 12) 佐長健司編 (1997) 『社会科でディベートする子どもを育てる』明治図書



〈チェックシート〉

A案（原子力エネルギー中心）		B案（自然エネルギー中心）	
決定	理由 大量に発電できる。	決定	理由 自然エネルギーが豊富にある。
環境	理由 実際に事故がおきている。	決定	理由 自然エネルギーが豊富にある。
経済性	理由 コストが安い。	決定	理由 自然エネルギーが豊富にある。

〈「解決策の評価表」の例〉

方策/視点	学 ぶ	時間	支持者
A	2	3	3
☆B	1	1	2
C	3	2	1

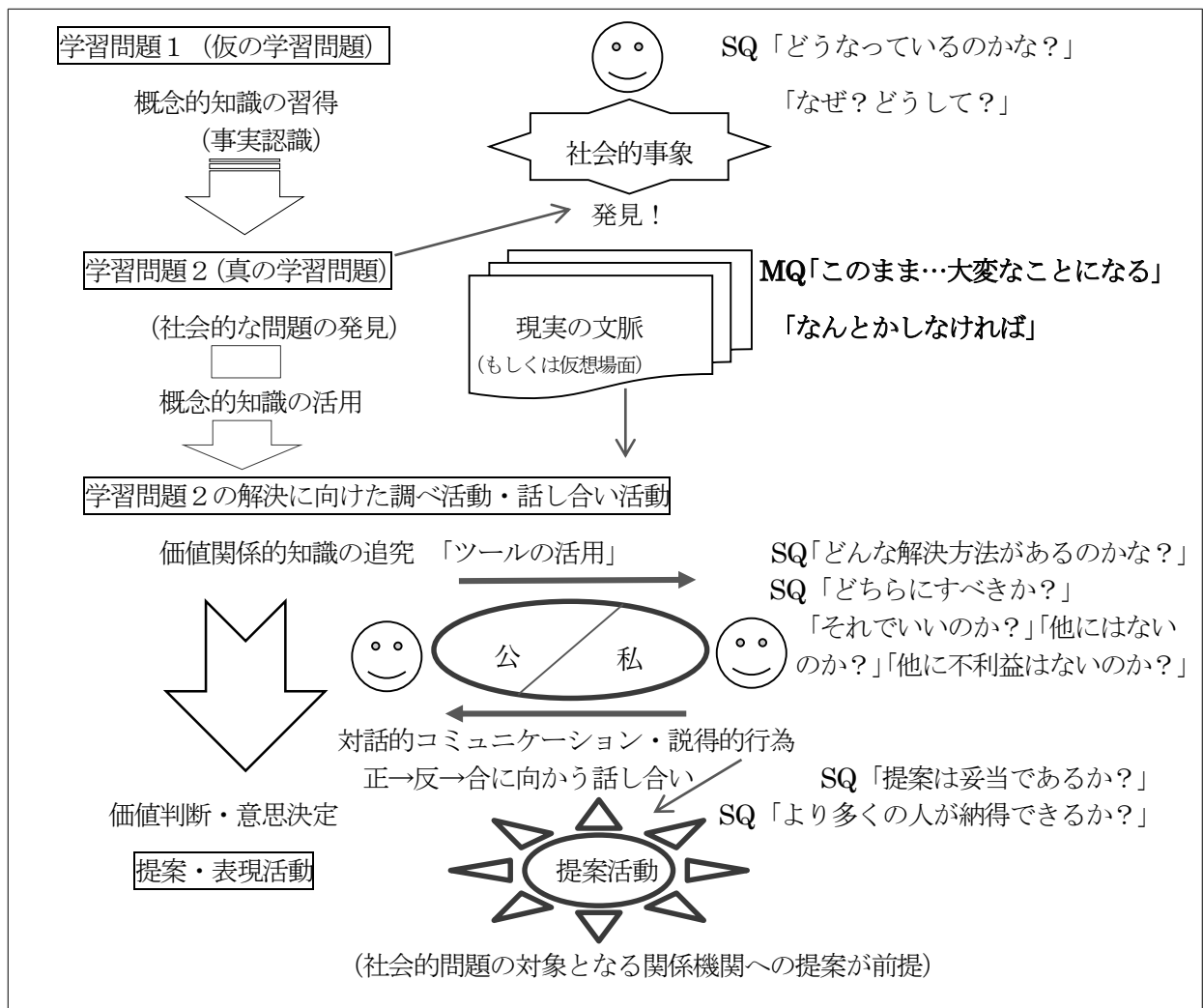
〈「プラン表」の例〉

観点	軍事貢献を含むP K O活動には参加するべきではない	
	解決策や対策	優先順位
国際協力	医療や教育の援助をする	1
平和	停戦の監視をする	3
国際交流	人的な貢献をする	2

「シンキングマップ」

（口は小集団での交流以降に記述したメモ）

巻末資料—1 本庄社会部で開発された思考ツール



巻末資料—2 本庄小社会科部が構想する意思決定型単元構成モデル（筆者作成）

年度	学習問題のレベル MQ (単元レベル) SQ (授業レベル) SSQ (活動レベル)	【分析視点1】評価研究の視点 ○文脈性 (問題認識) ●学びの協働性 問いの本質性	【分析視点2】社会科教育研究の視点 概念の再構成/活用状況など	【分析視点3】パフォーマンス評価との関連 社会への参加要請
24	4年生地域学習 SQ 学習問題1「なぜ、佐賀県の注目度が上がったのだろうか？」 MQ 学習問題2「多くの人が訪れ、魅力ある佐賀市にするまちづくり案を考えよう。」 本時SQ「古い建物を生かした歴史まちづくり案について、多くの市民が納得するのか考えよう。」 SSQ 視点表で考えよう。	○観光客増加策としては問題意識が薄いことが推察される。 ●視点表というツールを活用することによって協働性のある追求が可能になっている。 説得的行為	概念再構成型 ただ、習得的な意味合いは薄い 単元レベル：佐賀県の様子を様々な観点から調べ、佐賀の良さをさらに発見する学習課題 授業レベル：一つの案について、いくつかの価値から吟味・検討を行う 公的論争型 (多くの人が納得する) 立場の多様性の考慮	授業レベルにとどまる問い 方法知 ○内容知△ 佐賀県観光課への提案 行政への提案 参画性あり 他者性は高い
	5年生林業 SQ 学習問題1「林業によって、森林はどのように維持されているのか？」 MQ「学習問題2 これからの日本の木材の利用拡大について考えよう。」 本時SQ「国産材を使った家を建設する案について、多くの人が納得するのか考えよう。」 SSQ 視点表で考えよう。	○日本の森林が木材として利用されていない。このままでは環境的・資源的機能の消失→問題意識が薄い ●視点表というツールを活用することによって協働性のある追求が可能になっている。 説得的行為	概念再構成型 単元レベル：森林の機能についての概念形成を行う学習課題 授業レベル：国産材の消費拡大についての議論 公的論争型 (多くの人が納得する) 立場の多様性の考慮	授業レベルにとどまる問い 方法知 ○内容知△ 住宅会社への提案 ※そもそも住宅会社 (販売店) に提案すべきものなのか？ 他者性は高い
	5年生食料生産 SQ 学習問題1「日本の食料自給率は、なぜ低いのだろうか？」 MQ 学習問題2「これからの日本の食料自給率について考えよう。」 本時SQ「国が補助金を出し、米粉米を増産する案について、多くの人が納得するのか考えよう。」 SSQ 視点表で考えよう。	○食料の輸入が滞った場合への認識→自身の食生活に関わる課題 文脈性あり 子供自身が現実に関与する可能性あり。 ●視点表というツールを活用することによって協働性のある追求が可能になっている。 説得的行為	概念再構成型 単元レベル：これからの日本の農業のあり方全般についての概念形成 授業レベル：米粉米の生産拡大についての是非を問う議論 特定状況問題解決型	授業レベルにとどまる問い 方法知 ○内容知△ JA 佐賀への提案 生産販売の両方を受け持つ組織への提案。ただその規模としていかがものか？ 他者性は高い
23	6年生政治学習 SQ 学習問題1「放課後児童クラブの目的と運営について調べよう。」 MQ「待機児童をなくすためにはどうしたらよいのだろうか？」 本時SQ「待機児童をなくすために子育てをしている人の立場から、よりよい案を決めよう。」 SSQ 視点表で考えよう。	○子育て支援の一つである「放課後児童クラブ」を取り上げ、民意を受けた政治の働きについて調べていく課題。近年問題になっている待機児童の増加について考えさせる授業構成。現実に関与する可能性は薄い。 ●チェックシートというツールを活用させ、それぞれのプランに内包される価値を考慮することにとどまる。	概念再構成型 単元レベル：政治 (行政) の働きについて調べる。子供自身の生活体験として放課後児童クラブ (通称学童) への経験がある子はいら。しかしながら「待機児童」の問題に関して切実性はあるのか？ 授業レベル：子育てをしている人の立場でよりよい案を個人で決めさせる。 特定状況問題解決型	最善と思える案を提案文としてまとめる。  「現実世界への挑戦」がうかがえる。ただ、提案文の宛先は不明
	3年生地域学習 SQ 学習問題1「なぜ地域の行事が続けられているのか？」 MQ 学習問題2「地域のお祭りかたりべの里本庄祭の参加者を増やすために参加できない人の立場も考えて、よりよい案を決めよう。」	○祭り (ここではイベント) への参加者の減少という問題を捉え、地域の祭り (イベント) への参加者を増やすと言うことは現実に関与する可能性あり。ただ社会科の学びと言えるのか ●チェックシートというツールを活用させ、それぞれのプランに内包される価値を考慮することにとどまる。	概念再構成型？ 単元レベル：地域の行事について調べることを通して、そこにある地域の人々の思いや願いを探究していく課題 授業レベル：参加者を増やすための案 (アイディア) を比較検討させる。その後個人で意思決定する。 特定状況問題解決型	最善と思える案を提案文としてまとめる。提案文の宛先は不明なため 「現実世界への挑戦」はうかがえない。
	3年生地域学習 SQ 学習問題1「スーパーマーケットにお客さんが集まるのはなぜだろう？」 MQ 学習問題2「スーパー3の1」に置く食料品について考えよう。」	○子供の生活と密着しているスーパーマーケットの品揃え (食料品) について、考えさせる。子供の生活と密着している分、文脈性としてあるが、販売者の立場からどのような真正性があるか疑問 ●チェックシートというツ	概念再構成型？ 単元レベル：売る工夫 (販売者)、買う工夫 (消費者)、生産者を調べることによって経済の入門的な単元構成になっている。課題としては明確ではない。 授業レベル：架空 (自分たちが経営する) のスーパーにどのような食品を置くか個人で意思決定する。	最善と思える案を提案文としてまとめる。提案文の宛先は不明なため 「現実世界への挑戦」はうかがえない。



		ルを活用させ、それぞれのプランに内包される価値を考慮することにとどまる。	特定状況問題解決型	
22	4年生地域学習 SQ「佐賀県にはどんな魅力があるのかな？」 MQ「これからの佐賀県が力を入れていくべき事業を考えよう。」 SQ「みんなが納得する地域づくり案を絞り込み、支持する案を決めよう。」	○佐賀のかかえる問題点を発見し、今後佐賀県が力を入れていくべき事業を捉える。一問題意識が薄い文脈性は感じられない。 ●シンキングマップを活用することによって協働性のある追求が可能になっている。対話的コミュニケーションはあるが、授業レベルにとどまる問い	概念再構成型 単元レベル：佐賀県の特徴ある産業や観光、自然に関する概念形成 授業レベル：地域づくり案とシンキングマップでの案との齟齬が大きい。単なるアイデアレベルの出し合いに留まる。 公的論争型	方法知○内容知△ 「佐賀県の魅力を生かす」ことの効果についての本質的な問いがない。 「私の佐賀県地域づくり案」の意見文作成
	4年生地域学習（地域の安全や安心を守る仕事） SQ「わたしたちが出たごみはどのように集められるのかな？」 MQ「4の1団地のゴミ出しルールを考えよう。」 SQ「みんなが納得するゴミ出し場所やルールを絞り込む意見交流を行い、支持するルールを決めよう。」	○架空の場面設定であるが、子供の問題意識が高く文脈性・切実性が感じられる。子供自身が現実に関与する可能性あり。 ●シンキングマップというツールを活用することによって協働性のある追求が可能になっている。 説得的行為	概念再構成型 いわゆる「迷惑施設」を巡る議論 ただ、個人の感情の範囲を超え得るかどうか？その点から自己調整型とも言える。 公共圏構築型	授業レベルの問い 自治会への意見文作成 ただ、架空の「4の1団地」であるが故に、誰に対して「意見」するのか明確でない。本質的な「迷惑」と「必要」「公共性」についての問いは欠如している。
21	6年生国際理解 SQ「国際連盟の役割について調べよう。」 MQ「平和な世界をつくるためには日本はどのような活動に力を入れていくべきか？」 SQ「これからの日本に求められる国際貢献を絞り込み、支持する国際貢献案を決定しよう。」	○現在の日本に求められる国際貢献について探究的な学習問題となっている。ただ、子供自身が現実に関与する可能性は薄い。 ●シンキングマップというツールを活用することによって協働性のある追求が可能になっている。	概念再構成型 単元レベル：混沌とした国際情勢を鑑みて国連の役割や、常任理事国の意味などについても発展的に考えさせている。 授業レベル：国際貢献の選択 公的論争型	日本政府への提案文作成 「これからの国際貢献のあり方」を問うことは、本質的な問いといえる。
	5年生林業 MQ「森林を整備し、国土を保全するための森林づくり企画案を考えよう。」 SQ「森林を整備し、国土を保全するための森林づくり企画案を絞り込み、支持する案を決定しよう。」	○日本の森林保護と林業の発展について考えさせているが、子供自身が現実に関与する可能性は薄い。 ●シンキングマップというツールを活用することによって協働性のある追求が可能になっている。	概念再構成型 知識活用型 単元レベル：森林がもつ国土保全能力や環境に関する概念形成 授業レベル：様々な森林づくりの是非 特定状況問題解決型	国民全体へ向けた意見文作成 「いかに森林の整備を行うか？」に関する問い。本質的な問いではない。
	5年生日本の工業 SQ「日本の工業の様子について調べよう。」 MQ「日本の工業の発展をこれからも続けるための案を絞り込み、支持する案を決定しよう。」	○日本の工業生産の現状認識特に国内産業の空洞化の問題を取り上げる。子供自身が現実に関与する可能性は薄い。 ●シンキングマップというツールを活用することによって協働性のある追求が可能になっている。	概念再構成型 単元レベル：日本の工業の特徴（加工貿易国・ものづくり立国）であることの理解促進 授業レベル：工業製品の開発の選択 特定状況問題解決型	「これからの日本の工業製品はこれだ！」意見文の作成。対象は不明。工業製品開発そのものへの懐疑的な意見は？
20	4年生地域学習 MQ「これからの佐賀市の街づくりについて考えよう。」 SQ「佐賀市のまちづくりのための商店街再生案の優先順位を決めよう。公園化するか新たなお店を誘致すべきか？」	○佐賀市の中心商店街の衰退を学習課題にしていることで、近隣に住む本校児童は現実に関与する可能性あり。 ●チェックシートを活用させ、プランの優先順位を考えさせることで、プラン（含意されている価値）を相対的に捉え、優先すべき理由を交流させ、集団決定を行わせる。	概念再構成型 単元レベル：商店街活性化を手がかりに佐賀市の発展を考える。 授業レベル：商店街活性化の方法の選択と意思決定 特定状況問題解決型	佐賀市パブリックコメントへの提案文作成 佐賀市の街づくりというよりは商店街をいかに活性化させるかという問い。 社会への参加要請
	5年生林業 SQ「森林にはどのような機能があるのか調べよう。」 MQ「これからの日本の森林保持について考えよう」「森林を守っていく案の優先順位を決めよう。」	○現在の森林を保持することが危機的な状況であるという学習問題。子供自身が現実に関与する可能性は薄い。 ●チェックシートを活用させ、プランの優先順位を考えさせることで、プラン（含意されている価値）を相対的に捉え、優	概念再構成型 単元レベル：森林の働きや林業従事者を守る活動についての概念理解 授業レベル：森林保持のためのプランの選択と意思決定。 特定状況問題解決型	「これからの森林について考えたこと」の作文 「森林の守ることの意味や意義は？」については、単元プロセスに含意されていると推

		先すべき理由を交流させ、集団決定を行わせる。		察できる。
	4年生地域学習 SQ「わたしたちが捨てたごみはどのように処理されるのかな？ごみの行方は？」 MQ「これからの佐賀市のごみ減量について考えよう。」 MQ「佐賀市のごみ減量プランについて優先順位を決めよう」	○佐賀市のごみ処理の現状認識と自分たちの生活スタイルとのかかわり。現実に関与する可能性あり。 ●チェックシートを活用させ、プランの優先順位を考えさせることで、プラン（含意されている価値）を相対的に捉え、優先すべき理由を交流させ、集団決定を行わせる。	佐賀県全体のごみ排出量は減少傾向にあるのに、佐賀市のごみ排出が他の市町村よりも多いという事実認識 概念再構成型 単元レベル：健康な暮らしを支えるごみ処理の必要性とごみ減量の意味理解 授業レベル：ごみ減量の方策の選択・意思決定 公共圏構築型	ごみ減量の方法について、地域の方（本庄町）へのプレゼンテーション「ごみを減らすことはどのような意味があるのか」についての問いは含まれる。 社会への参加要請
19	3年生地域学習 SQ「公民館ってどんなところかな？」 MQ「本庄公民館をたくさんの人が利用してくれるような方法を考えよう。」	○校区の中心的位置にある本庄公民会（この年に新築）の利用促進に向けた方法を考える。現実に関与する可能性あり。 ●チェックシートを活用させ、プランの優先順位を考えさせることで、プラン（含意されている価値）を相対的に捉え、優先すべき理由を交流させ、集団決定を行わせる。	概念再構成型 本庄公民館の利用促進のためにはどうすればよいか考えさせる。 単元レベル：公民館の施設設備の意味やその利用方法、地域の人々の願いなどを理解する。 授業レベル：公民館の利用促進方法の選択・意思決定 特定状況問題解決型	公民館長さんへの提案文 地域の公共施設（公民館）の意味や意義、必要性についての問いは、含まれる。 地域社会への参加要請
	5年生日本の工業 MQ「日本のエネルギー資源活用の未来について考えよう。」 SQ「これからの日本は、どのようなエネルギー資源活用を優先していくべきなのか決定しよう。」	○日本のエネルギー資源の活用方法について考える。つまり日常的に使う電気を起こすためのエネルギーをどのように活用するのかという意味において現実に関与する可能性あり。 ●チェックシートを活用させ、意思決定後のふり返り（省察）過程において価値分析を行わせる。	概念再構成型 これからは自然エネルギーか原子力エネルギーのどちらに重点を置くべきかという価値判断論題である。 単元レベル：それぞれのエネルギーのメリットデメリットを学習し、日本の現状に合ったエネルギー政策を考える。 授業レベル：自然エネルギーか原子力エネルギーのどちらに重点を置くべきか価値判断の省察 特定状況問題解決型	表現活動は特になし 新たな社会的問題の発見 この意味では、概念活用か？
18	5年生国土のようす SQ「日本の国土の様子はどうなっているのか？」 MQ「沖縄の問題について考えよう。」 MQ「これからの沖縄は、どのような問題を解決していくべきなのか考えよう。」	○沖縄県がかかえる問題について調べ活動を行い。沖縄の問題は日本全体（佐賀県も例外なく）に関わる問題であることを認識する。現実に関与する可能性あり。 ●チェックシートというツールを活用させ、意思決定後のふり返り（省察）過程において価値分析を行わせる。	概念再構成型 沖縄の歴史的経緯や自然環境、産業などを調べたことをもとに、優先して解決すべき問題を考える。 単元レベル：沖縄の問題は、日本にとってもどのような意味を持つのかについて考えさせる。 授業レベル：どのような問題を優先して解決すべきか価値判断の省察 特定状況問題解決型	表現活動は特になし 新たな社会的問題の発見 この意味では、概念活用か？
	4年生地域学習 MQ「佐賀の伝統的な「食」について考えよう。」 SQ「佐賀のりを守っていくためのプランを決めよう」	○佐賀のりが直面する問題を取り上げている。有明のり後継者問題、国内ののり消費減少、有明海の環境悪化を、販売・生産・地理的な位置・価格の面からとらえさせる。 ●討論を方法論として集団的意思決定を行わせる。	概念再構成型 単元レベル：現在の佐賀県ののり養殖業が抱えている問題を調べることを通して、佐賀県の自然を活用した産業を包括的に探る学習課題。 授業レベル：典型事例として「のり」を取り上げ、佐賀のりを守っていくための方策を討論によって決定する。 特定状況問題解決型	単元終末に、提案文を書き、佐賀のり組合に提案文を送る。 社会への参加要請
17	4年生地域学習（地域の安全や安心を守る仕事） SQ「本庄町はどのようにして守られているのかな？」 MQ「本庄町の安全なくらしを守ることにについて考えよう。」 SQ「本庄町セーフティプランを決めよう。」	○自分たちの住む町の安全が脅かされている状況を捉え、どのようにして安全を確保していくかを考えさせる。自分たち住む本庄町に住む子供たちの意識から現実に関与する可能性あり。 ●討論（方法）によって、プランの集団決定を行う。価値の意識化はほとんどないと思われる。	概念再構成型 単元レベル：地域の安全を守る仕事を調べることを通して、自分たちの町は自分たちで守る意識の醸成 授業レベル：セーフティプランの選択・意思決定 公共圏構築型	単元終末に本庄町自治会に提案する。

16	5年生情報社会 MQ「私たちの身の回りの情報の利用について調べ、報告会を開こう。」 SQ「情報の利用について、意見交流を行い、これからの情報利用のあり方について考えよう」	○情報化社会の仕組みや自分たちがどのような情報を活用しているか、情報化社会にいかに対応していくがテーマになっている。通信機器の活用を含め、子供が現実に関与する可能性あり。 ●授業では調べた事を発表し合う構造になっており、価値については触れない。	知識獲得型 単元レベル：情報と自分たちのかかわりについて調べさせ、これからの情報化社会でどのようなふるまうかについて考えさせる。 授業レベル：調べた事を互いに発表して自分の考えを深めさせる	単元終末に、情報化社会のあり方について自分なりの考えを書く。提案文の宛先は不明なため「現実世界への挑戦」はうかがえない。
	5年生食料生産 SQ「日本の食料生産はどのようなになっているのだろう」 MQ「これからの日本の食糧自給率について考えよう。」 MQ「これからの日本の食料生産のあり方について考えよう」	○これからの食料自給率はどうかあるべきか？輸入派？自給率アップ派？が単元を貫くテーマである。 ●輸入派？自給率アップ派？それぞれの立場で2回の意見交換を行う。集団決定は行わず、自分の考えを深めることに留まる。協働性は薄い。	概念再構成型 単元レベル：単元を貫く学習テーマはあるが、単元計画は個人の学習問題を設定している。日本の食料生産のあり方というよりは、調べた事を互いに発表し合って自分の考えを深めることに重点を置いている。 授業レベル：調べた事を互いに発表して自分の考えを深めさせる	単元終末に、今後の食料生産のあり方について自分なりの考えを書く。提案文の宛先は不明なため「現実世界への挑戦」はうかがえない。
15	5年生伝統工業 MQ「これからの佐賀の伝統工業について考えよう。」 SQ「有田焼の後継者がいなくなったら、有田の焼き物はどのようなになっていくのだろう。」	○有田焼の後継者問題を取り上げている。子供自身の現実への関与はかなり薄い。 ●有田焼の灯を消すな！かま元、町、県の取り組みを調べる内容構成になっている。	概念再構成型 単元レベル：佐賀県の伝統工業である有田焼の状況を調べさせることで有田が抱える状況をとらえる。他の地域の伝統工業の状態と比較したり、相違点を指摘したりすることはなく一般性に欠ける。 授業レベル：「後継者がいなくなったらどうなるのか？」という問題の深刻性を問う学習問題で展開している。GTの話（後継者問題）を聞いて感想を書く。特定状況問題解決型	「佐賀県の焼き物産地紹介」をつくり、他の学校の友達に紹介する。友ある紹介に留まっているため「現実世界への挑戦」はうかがえない。
	6年生国際理解 MQ 開発途上国へのよりよい国際協力について考えよう。 SQ「生活格差が広がるとどのようなことになるか考えよう」	○開発途上国の苦しい生活状況を捉えさせ、日本がこれから何ができるか考えさせようとしているが、学習者の現実への関与としては薄い。問題の深刻性を捉えようとする学習課題 ●協働性はあまりないと思われる。	概念再構成型 単元レベル：先進工業国と開発途上国の生活格差を捉えさせ、開発途上国への日本のこれからの国際貢献のあり方について考える学習課題 授業レベル：先進国と発展途上国の生活格差が広がるとどのような事態を招くのか考える 特定状況問題解決型	関係機関への提案文を送る。提案文の宛先は不明なため「現実世界への挑戦」はうかがえない。
	6年生歴史学習 MQ 佐賀城があった頃の社会の様子や現在の歴史遺産の状況について調べよう。佐賀の歴史を残すための佐賀城歴史資料館展示プランを考えよう SQ「佐賀城歴史資料館について考えよう」	○歴史的事象と『現実』をつなげようとしているが、現実の問題（そもそもこの問題に問題性が薄い）に関与する真正性はほとんどない。 ●学習の協働性はない	知識活用型？ 単元レベル：歴史と現在をつなぐ学習課題を設定している。江戸時代の暮らしを調べ、佐賀城歴史資料館の展示プランを考えさせる学習課題 授業レベル：江戸時代の歴史遺産が保存されなくなる状況を考えさせる学習課題。	佐賀城歴史資料館に提案する。
14	3年生地域学習 人にやさしい街づくり SQ 町のやさしさ度をチェックしよう MQ 安心して生活できるやさしい町づくりを考えよう。 SQ「人にやさしいまちづくりプランをつくろう」	○障害者や高齢者の立場で街を客観的に見させることでこれまでの生活経験ではなかなか気づかない（見えない）現実の問題の発見を促している。 ●GT の話を聞くことによって、今後起こりうる問題点を明確にしようとしているが協働的な学びとは言えない。	知識獲得型 単元レベル：高齢者や障害者の立場に立った街づくりについて調べ、「優しさとは何か」について考えさせる学習課題 授業レベル：安全や不自由さの視点から、今後どのようなことが起こりうるか考えさせる。 特定状況問題解決型	佐賀市への提案
	5年生林業 MQ 健全で活力ある森林整備のあり方を考えよう。 SQ「望ましい森林整備のためのプランを考えよう。」	○森林と市民生活との接点を見だし、後継者問題や輸入木材との関係を捉えさせることは現実問題としてあるが、学習者自身が「関与」できるかどうかは疑問 ●（森林の整備がされなくなる）社会を予想させ、それについて意見交換を行う。意見交換の必要性が不明。よって協働性は薄い。	概念再構成型 単元レベル：森林整備がかかえる問題を調べることで、これからの林業のあり方について考える学習課題 授業レベル：間伐が十分にされないと、森林がどのようなことになるかその影響を考えさせる（知識：概念習得としての学び） 特定状況問題解決型	関係機関に提案
	4年生地域学習 MQ 商店街にぎわいプラン「さがんまち」	○佐賀市中心商店街を活性化させるための案を考える。現実の問題への関与が多少は感じ	知識獲得型 単元レベル：佐賀市の空洞化と校外の町の広がりに関してどのような影響があ	「さがんまち」にぎわいプラン（絵と文）をまとめる。



13	SQ「にぎやかさがんまちプランを考えよう」	られる。 ●「プラン表」というツールを活用して、プランの優先順位をつけ、他者との話し合いを通して見直していく。協働性あり	るのかについての学習課題 授業レベル：自分のプランを「設備」の観点から見直す学習課題 特定状況問題解決型	提案文(プラン)の宛先は不明「現実世界への挑戦」はうかがえない。
	4年生地域学習 MQ 木原慶吾さんってどんな人だろう SQ「木原さんと一諸に「ふるさと佐賀」のCMソングをつくろう」	○CMソングの中にどのような言葉をいれるか社会の観点から考えさせようとしているが、現実の「問題」には全く寄与していない。 ●「プラン表」というツールを活用して、プランの優先順位をつけ、他者との話し合いを通して見直していく。協働性はあり	特別活動型 単元レベル：先人の地域の発展への思いや願いを通して生活向上への様々な取り組みを行ってきたことを追究させる学習課題 授業レベル：歌詞にどのような内容を入れるかを議論することを通して佐賀のよさを再認識することができるような学習課題 特定状況問題解決型	歌づくりの構想をまとめる。手紙で木原さんに送る。
	5年生林業 MQ 森林の様子や働きについて調べよう。 SQ「森林のめぐみをとるもどす方法を考えよう」	○森林のめぐみが「なくなっている」のでなんとかするという単元構成。現実の問題として関与していない。 ●「プラン表」というツールを活用して、プランの優先順位をつけ、他者との話し合いを通して見直していく。協働性あり	知識獲得型 単元レベル：森林のもつ機能を調べることを通して、後継者問題や森林の持つ機能低下について探究する学習課題 授業レベル：森林のめぐみをとるもどすプランの優先順位を他者と様々な観点(価値)から比較検討し、見直していく学習課題 特定状況問題解決型	意見文の作成(宛先は不明)提案文の宛先は不明なため「現実世界への挑戦」はうかがえない。
	4年生地域学習 SQ 特色ある地域のまちづくりについて調べよう。 MQ「これからの佐賀市のまちづくりについて考えよう。」	○佐賀市の問題点をどのように解決していくか、というよりはどのように発展させていくかにすり替わっている。現実性はほとんどなし。 ●「プラン表」を活用して、プランの優先順位をつけ、他者との話し合いを通して見直していく。協働性あり	知識獲得型 単元レベル：特色ある地域のまちづくりの事例として佐賀市を取り上げ、その特色や問題点を調べ、これからの佐賀市のまちづくりについて考える学習課題 授業レベル：プラン表を用いて佐賀市の街づくりプランを様々な観点から検討し、意思決定する。特定状況問題解決型	意見文を作成する特定の宛先があるわけではない
12	3年生地域学習 MQ「さがのむかしや人々のくらしについて調べよう。」 SQ「すみたいまち日本一の佐賀市にしよう。」	○特に現状の問題を扱っているわけではない。佐賀市の産業の活性化、文化的事業、生活環境の保全・整備を積極的に行っているという事実認識の獲得 ●「プラン表」を活用して、プランの優先順位をつけさせる。	知識獲得型 単元レベル：佐賀県や佐賀市の先人の取り組みについて調べ、生活が様々な点で変化したことを探る課題。これからの地域社会をどのように発展させていくべきかという問題の共有化。 授業レベル：まちづくりプランの順位を見直す。自らの順位を見直した結果を全体に報告する。個人の意思決定の範疇 特定状況問題解決型	特になし
	5年生環境学習 MQ 住みよい環境づくりについて考えよう。 SQ 住みよい環境にするためにはどんなプランが必要になるか考え直そう。	○「住みよい環境をつくるためには」ということで、かなり漠然とした学習課題になっている。そのための案については5年生の学習範囲というよりは発達段階縦断型と言える。 ●「プラン表」を活用して、プランの優先順位をつけさせる。	概念再構成型 単元レベル：日本の工業の発展や便利で快適な生活をするに伴って起こる様々な社会的問題についての学習課題。 授業レベル：住みよい環境にするためにはどんなプランが必要になるか考え直すことで意思決定を行う。自己決定の範疇を超えない。公共圏構築型	特になし
	3年生地域学習 SQ「鬼崎さんは、どのようなバラづくりをしているのだろう？」 MQ「これからのバラづくりについて考えよう。」	○バラ農家が抱えている問題について解決を図る。子供の現実への関与はほとんどない。 ●「プラン表」を活用して、プランの優先順位をつけさせる。	単元レベル：わたしたちのくらしとかかわりがあるものをつくる仕事について校区内の事例を取り上げ、追究させる学習課題 授業レベル：バラ農家が抱える問題に関してプランの優先順位を交流させる。個人問題解決型	意見文の作成(宛先は不明)提案文の宛先は不明なため「現実世界への挑戦」はうかがえない。
11	6年生国際理解 SQ「日本は世界の中でどのような国際貢献をしているのかな。」 MQ「自衛隊のPKO活動について考えよう」	○現在、日本がどのような国際貢献を行っているかをもとに自衛隊のPKO活動の議論について子供を巻き込んで考えさせる。現実の問題への関与は高いと考えられる。 ●「プラン表」を活用し評価表をもとに話し合っ意思決定を行う	概念再構成型 単元レベル：世界が抱える様々な問題について調べこれからの日本の国際貢献のあり方について考える学習課題 授業レベル：国連のPKO活動に参加すべきか否かをプラン表に基づいて優先順位を決定させる。特定状況問題解決型	意見文を作成する。提案文の宛先は不明なため「現実世界への挑戦」はうかがえない。
	6年生歴史学習 SQ 日本の近代化について調べよう。 MQ「日露戦争は避けるべき	○歴史的事象について客観的なデータをもとに価値判断・意思決定を行わせる。現実の問題とのつながりに乏しく、子供の	概念再構成型 単元レベル：日本の近代化の過程における日露戦争の意味について追究させる学習課題	意見文を作成する。提案文の宛先は不明なため「現実世界への挑戦」

	であったか？どうか考えよう」	関与は薄い。 ●「プラン表」というツールを活用し評価表をもとに話し合っ て優先順位を考えさせる。	授業レベル：現在の自分たちから見た 「日露戦争」の意味について考える。 歴史的問題判断型	はうかがえない。
	4年生地域学習 SQ 学習問題 A「水の「有効利用」について考えよう。」 MQ 学習問題 B「佐賀市の水を有効に使うプランについて話し合おう」	○必要な水を有効に使っていくための方法を考えること水道局の方の願いが単元を貫く「問い」になっており、子供が現実の問題に関与する可能性は低い。 ●「プラン表」を活用し、評価表をもとに話し合って意思決定を行う。	概念再構成型 単元レベル：水資源の必要性やそれにかかわる生活の在り方、行政としての水の有効利用について追究させる学習課題 授業レベル：行政の立場から水の有効利用に関するプランの策定を行い、優先順位を決める。 特定状況問題解決型	佐賀市水道局に提案する。
10	6年生政治学習 SQ 学習問題 A「高齢化社会」とはどのような社会だろう？ MQ 学習問題 B「豊かな高齢社会にするための方策を考え、県庁に提案しよう。」	○高齢化社会の到来による「社会活力の低下、介護の必要性、税金や保険料の高騰」等の問題を考えさせる。現実の問題への関与は薄いと考えられる。 ●「解決策の評価表」というツールを活用し評価表をもとに話し合って意思決定を行う。	概念再構成型 単元レベル：高齢化社会に関する地方公共団体や国の政治の働きについて調べ、豊かな高齢社会にするための政策を考えさせる学習課題 授業レベル：ディベートによって「豊かさ」を観点に「望ましいと考える方策」の主張を行う。公共圏構築型	佐賀県庁に提案する。 自分が家庭や地域でできることを考え「実行計画書」の作成を行う。
	6年生国際理解 学習問題 ASQ「平和」について考えよう。 MQ 学習問題 B「平和を築いていくための方策を考え、家族の人に提案しよう。」	○日本は世界的な平和を享受しているだけでなく、積極的に平和を守り、構築していくことが重要であることを前提に平和とは何なのかを問う構造になっている。 ●「解決策の評価表」を活用し評価表をもとに意思決定を行う。	概念再構成型 単元レベル：国際交流や国連の働き、役割について調べることを通して、国際紛争や国際的な事件を解決していく必要性を追求させる学習課題 授業レベル：ディベートによって「平和」を観点に「望ましいと考える方策」の主張を行う。 特定状況問題解決型	家族の人に提案文をわたす。世界の平和のために自分ができることを「実行計画書」の作成
	4年生地域学習 MQ 住みよい町づくりをしよう 学習問題 A 不明 SQ 学習問題 B「住みよい町づくりのための解決策を考え、佐賀市に提案しよう」	○佐賀市がかかえる問題というよりは、新しい地域づくり、すみよい町づくりにはどのようなことが必要なのかを考えさせる。現実の問題ではない。 ●「解決策の評価表」というツールを活用し評価表をもとに話し合って意思決定を行う。	概念再構成型 単元レベル：佐賀市の「住みよい」まちづくりについて様々な観点（価値）から捉えていく学習課題 授業レベル：ディベートによって「住みよさ」を観点に「佐賀市は～すべきである」主張を行い、判定を行う。公共圏構築型	個人で最善の解決策を決定し、佐賀市に提案文を送る 自分にできること「実行計画書」の作成
9	3年生地域学習 SQ 学習問題 A「佐賀市の土地の様子や人々のくらしはどのようにかわってきたのだろう」 MQ 学習問題 B「さらに魅力ある佐賀市にするための方策を考え、佐賀市に提案しよう」	○問題の設定や子供自身が問題を発見するわけではない。子供の現実の問題に関与する可能性は薄い。 ●ディベートを方法論＝協働性と言えるか？	概念再構成型 単元レベル：今以上に魅力ある佐賀市にするための方法を追究する学習課題 授業レベル：「佐賀市に○○を作るべき」という政策選択をディベートし、集団的意思決定を行う。 特定状況問題解決型	佐賀市に提案文を送る 自分にできること「実行計画書」の作成
	5年生林業 SQ 学習問題 A 日本の森林このままでいいのか？学習問題 A 森林資源はどのような働きをしているのだろうか。 MQ 学習問題 B「日本の森林資源を守っていくための方策を考え、営林署に提案しよう」	○森林破壊という社会的問題の解決ためにどのような解決策があるかを考えさせるものであり、現実の問題への関与はある。 ●ディベートを方法論＝協働性と言えるか？	概念再構成型 単元レベル：森林資源が破壊されているという問題意識をもとに森林の保護や育成していくための方策の考える学習課題 授業レベル：「リゾート開発を辞めるべき」という論題でディベートを行い、集団的意思決定を行う。 特定状況問題解決型	営林署に提案する。 地球規模の環境問題に触れて、自分にできること「実行計画書」の作成
	3年生地域学習 SQ 学習問題 A スーパーマーケットってどんなところだろう？ MQ 学習問題 B「ジャスコをもっといいお店にするための方法を考えよう。」	○ジャスコ（スーパーマーケット）をよりよい店（地域の人に親しまれる店）にするためにどのような方法があるかを考えさせる。現実の問題ではない。 ●ディベートを方法論＝協働性と言えるか？	概念再構成型 単元レベル：スーパーマーケットの機能や売る工夫について調べることを通して販売者や消費者の立場で経済のシステムを考える学習課題 授業レベル：「ジャスコは営業時間を長くすべき」論題でディベートし、集団的意思決定を行う。 特定状況問題解決型	ジャスコ（当時）に提案する
8	6年生林業 SQ 学習問題 A「日本とかわかりが深い地球環境問題にはどのようなものがあるのだろうか」 MQ 学習問題 B「森林破壊を	○環境破壊の事例としての「森林破壊問題」がメインのテーマに設定されている。現実の問題であるが、子供自身の関与は認められない。指導案には「自分も環境形成者の一員としての	概念再構成型 単元レベル：森林破壊を防ぐために「日本がするべき」解決策を立案・検討させる学習課題 授業レベル：本時のめあてである「植林のための援助資金をもっと出すべきで	環境庁（当時）に提案する。 子供個々には実行計画書の作成がある。

	防ぐための解決策を考え、環境庁に提案しよう。」	自覚をもち」という文言がある。 ●ディベートを方法論＝協働性と言えるか？	ある」という論題に対して自分の考えをディベートで表出する。「見通しカード」の活用 特定状況問題解決型	
	4年生地域学習 SQ 学習問題 A「もし事故が起きたらどのように活動しているのだろうか」 MQ 学習問題 B「南部バイパス「事故 0」の解決策を考え、県警本部に提案しよう。」	○本庄小学校の校区にも県内で事故率が高い「南部バイパス」があり、事故が身近なものになっている。このこと踏まえ、現実の問題の「解決」への挑戦という意味で子供の関与は大きいといえる。「地域の一員としての自覚」の文言がある。 ●解決策の評価表を活用して、学級としてより望ましいと考える解決策を決定に関しては協働性が高いと言える。	概念再構成型 単元レベル：地域の安全を守るための関係機関の働きや人々の工夫や努力を調べることを通して、社会的な問題（交通死亡事故が増加傾向である）を発見、その解決策を考えさせ、集団的意思決定を行わせていく学習課題 授業レベル：「中央分離帯にフェンスを作るべきである」という論題に対して自分の考えをディベートで表現する。 特定状況問題解決型	佐賀県警察本部に提案する子供々々には実行計画書の作成がある。
7	4年生地域学習 MQ「わたしたちの考えるツアープランを長岡市の人に送ろう」 SQ「雪国体験ツアープランを見直して、これからの活動の内容を考えよう」	○現実の「問題」を設定しているわけではない。雪の多い地方のくらしがどのように成り立っているのかの「理解」を目標とした単元設定といえる。 ●プランの提案はあるが、協働の必然性は薄い。	知識獲得型 単元レベル：降雪量の多い地域を事例として取り上げ、厳しい自然環境の中でそれを克服し、利用しながらよりよい暮らしを目指している姿を調べることを通して、広い視野から地域社会の生活を考える学習課題 授業レベル：プランのグループごとに提案し、質問・指摘を受け、自分たちのプランの改善を図る。自己調整型	長岡市の人（長岡市日越小）にツアープランの提案を送る。  方法知が中心
	6年生 国際理解学習 MQ「ホームステイは中国ですべきである」について自分の考えを主張する。 SQ「中国やアメリカ合衆国の人々の生活の様子について話し合い、これから調べる内容や調べる方法を考えよう。」	○現実の「問題」を設定しているわけではない。「異文化理解」を目標とした単元設定といえる。欧米志向への問題意識と脱却をねらっている。 ●中国・アメリカに分かれディベートのルールに基づきながら自分たちの主張を行う。協働性としては薄い。	知識獲得型 単元レベル：異なった文化的背景をもつ人々との理解を中心に我々のつきあい方を考えさせる学習課題 授業レベル：それぞれの立場に分かれてその場でホームステイすることの意義について観点に沿いながら主張させる。ただ、授業のねらいは、内容を深めることではなく、その後の調べ活動の明確化を図るものである。「見通しカード」の活用 情報発信型 自己調整型	新たなホームステイのあり方について作文を書き、カルチャーセンターに送る。  方法知が中心
	5年生情報 MQ「わたしたちの願う番組について考えよう ー番組計画表をつくって放送局に送ろう」 SQ「それぞれのグループからの提案について意見交換を行い、自分たちの計画書を見直そう」	○現実の「問題」を設定しているわけではない。情報を伝達する側の工夫や努力を「理解」することを目標とした単元設定といえる。 ●それぞれのグループの意見交換で自分たちの主張を行う。協働性としては薄い。	知識獲得型 単元レベル：情報の発信と受信のかかわり方を考えさせる学習課題 授業レベル：本時授業のねらいは、番組計画書の内容を深めることではなく、その後の調べ活動の明確化（番組の根拠となる資料やデータなどの準備状況または資料の妥当性など）を図るものである。「見通しカード」の活用 情報発信型 自己調整型	番組計画書を放送局に提案（手紙を書く）する。  方法知が中心
	5年生日本の工業 MQ「わたしたちが考えるこれからの車についてプランを立てよう。ー提案カードをつくって車会社に送ろう」 SQ「提案カードを見直して、自分たちのキャッチコピーをもっと伝わる内容にしよう。」	○現実の「問題」を設定しているわけではない。車の生産側の工夫や努力をこれからの車づくりに関連させて「理解」することを目標とした単元設定といえる。 ●それぞれのグループの意見交換で自分たちの主張を行う。協働性としては薄い。	知識獲得型 単元レベル：車の生産とそれにかかわる自分たちの願い関連させて考えさせる学習課題 授業レベル：本時授業のねらいは、これからの車プラン（キャッチコピー）の内容を深めることではなく、その後の調べ活動の明確化（番組の根拠となる資料やデータなどの準備状況または資料の妥当性など）を図るものである。「見通しカード」の活用 情報発信型 自己調整型	これからの車プランを車会社に提案（手紙を書く）する。  方法知が中心